



フル、散髪に挑戦!

出場者、全員完走! ありがとうございます!

10月28日(土) / ナイロビマラソン・チャリティ・ランのご報告

「子どもたちと一緒に走りたい、アピールしたい!」その一心で参加したナイロビマラソン・チャリティ・ランが無事終わりました。

当日は時々雲が湧く絶好のマラソン日和、モヨの名前の下に走る走者は21名です。ティカからは、「新しい家」の子どもたち、スタッフ、元ストリートの子どもと先生、ウガンダから駆け付けてくれた役員のAさん、それに私の総勢14名。ナイロビからは、日本人学校の先生とご家族、旅行会社のYさんと息子さん、ティカに住む協力隊員のMさんの7名、足の手術をしたパティは応援、ヴィジターのお二人は写真撮影です。

日本人学校のI先生はフル、協力隊のMさんはハーフ、小さいお子さんと一緒に参加して下さった方々は3キロのファミリーコース、私たちティカ組は全て10キロに挑戦します。

ナイロビ組の方々と挨拶を交わし、お互いの健闘を誓いあい10キロのスタート地点へ。15,000人近い走者の中でも10キロは人数が多く、延々と続く人、人、人です。主催者側から配られた白いTシャツの中で、モヨのロゴを入れた赤いオリジナルのTシャツ



記念撮影

はよく目立ち、青空に映えます。

7時半、いよいよ私たち10キロ組のスタートです。何千人もの人の波がいっせいに動き出します。3キロ地点辺りまで来たとき歓声が起こりました。折り返してきたトップ集団です! 応援しながら走るうちに向こうに赤い色が! モヨの走者の中でトップのムイガイです! 彼も気付きました。拍手で見送り走り続けます。ケヴィン、ギソング、ブグワ、ジョン、スティーブン、チェゲと次々に子どもたちの姿が続きます。ギゲ先生、スタッフのピウス、ナンシー、ジェリも健闘しています。

彼らに拍手を送ったり互いに挨拶したりしながら走るうち折り返しの5キロ地点! 「よくここまで走れたものだ」と自分で驚きました。多分すれ違う子どもたちやスタッフの応援に助けられたのでしょう。5キロを通過してホッとしたのか、ちょっと立ち止まってしまったのをきっかけに歩いたり走ったりです。

あっ! ゲートです! ゲートの下には赤いTシャツ! 先にゴールした子どもたちやスタッフが出迎えてくれます! 飛び出してきた彼たちと一緒にゴール! かかった時間は不明ですが、中ほどの位置だったようです。何はともあれ、10キロ組は全員完走です。

その後、ハーフ、フルマラソンに参加したお二人を球技場で待ちました。ハーフ、フルは出発が遅い上、距離も長く時間がかかります。ヴィジターが準備して下さったジュースとパンケーキを頂きながら次々帰ってくる走者に目を凝らします。

ついに、苦しそうに、それでも笑顔で競技場に帰って来たハーフ出場のMさんに続き、「モヨの子どもたちの為ならフルを完走出来そうです」と自らをスポンサーしてフルに挑戦して下さったI先生のゴールです! 拍手で迎えながら涙が出ます。お二人とも長い、苦しい距離をありがとうございました。これでモヨのチャリティ・ランに出場下さった全員が完走です。最年少の2才のMちゃん、7才のT君も健闘、完走し

しました。

走ってくださった皆様、子どもたち、スタッフのみんな、どうもお疲れ様でした。本当にありがとうございました。そしてスポンサーになってくださった方々、ご協力ありがとうございました。子どもたち、スタッフ共々心よりお礼申し上げます。

右は収支のご報告です。

- 収入：230,486円
(日本—119,195円・ケニア—87,300円・英—8,991円・日本約束—15,000円)
- 支出：41,310円(交通費その他)
- 利益：189,176円…「孤児たちの家」建設資金の一部として使わせて頂きます。

重ねてご協力ありがとうございました。 松下

キャンペーンご協力のお願い

ティカのストリートの子どもの日々の日々を昨年6月～11月までの5ヶ月をかけて撮影された小林茂監督のドキュメンタリー映画「空腹を忘れるために」(仮題)を持って、—「孤児たちの家」建設に向けて—のキャンペーンを来年の秋9、10、11月に実施することになりました。キャンペーンは、上映会と短い講演という形を考えています。その内容に関してまず各地の支援者の方々とご相談させて頂くために、3、4月に日本への一時帰国を予定しています。その日程案を下記に記します。この案を元に

各地の皆様と詳細を決めさせて頂きたいと思っておりますので、皆様のご協力をよろしくお願い致します。

なお、この時にはドキュメンタリー映画「空腹を忘れるために」(仮題)を見て頂いた上でご相談出来たらと、その旨小林監督にお願いしてあります。

また、監督の出身地新潟地区では3月に完成試写会と講演を行う予定です。徳島からは上映会のための実行委員会を立ち上げたいという嬉しい便りも頂いています。重ねて皆様のご協力を心からお願い申し上げます。 松下

3月			4月		
4	火	ナイロビ発	1	火	徳島→愛媛(愛媛)
5	水	成田着	2	水	愛媛→徳島
6	木	神奈川	3	木	徳島→大阪→福岡
7	金	新潟・長岡市(東京→長岡)B	4	金	福岡
8	土	新潟・上越市	5	土	福岡→佐賀
9	日	新潟・長岡市	6	日	佐賀
10	月	新潟	7	月	佐賀→長崎(長崎)
11	火	新潟	8	火	長崎→鹿児島(鹿児島)
12	水	新潟	9	水	鹿児島→沖縄
13	木	新潟・新発田市	10	木	沖縄
14	金	新潟・新発田市(夜)	11	金	沖縄→北海道
15	土	新潟・白根市(午後)三条(夜)	12	土	北海道
16	日	新潟・新潟市(午後)阿賀・たんぼぼ(夜)	13	日	北海道
17	月	新潟・阿賀・たんぼぼ→長岡	14	月	北海道
18	火	新潟	15	火	北海道→岩手(岩手)
19	水	長岡→東京	16	水	岩手→秋田(秋田)
20	木	関東	17	木	秋田→山形(山形)
21	金	関東(東京)モコ役員年次総会	18	金	山形→宮城(仙台)
22	土	関東	19	土	仙台→東京
23	日	関東	20	日	関東
24	月	東京→三重(三重)	21	月	成田発
25	火	三重→奈良(奈良)	22	火	ナイロビ着
26	水	奈良→大阪(大阪)	23	水	
27	木	大阪→神戸(神戸)	24	木	
28	金	神戸	25	金	
29	土	神戸→徳島	26	土	
30	日	徳島	27	日	
31	月	徳島	28	月	

映画「空腹を忘れるために」(仮題)の制作状況の報告 監督 小林 茂

小林監督と秦さん

ドキュメンタリー映画の制作にご協力をたまわり御礼申し上げます。昨年5か月間の撮影を終えて帰国してから早いもので1年が経過しました。編集の秦さんの家の近く、東京・国分寺に部屋を借り編集室を作りました。帰国後、腎不全が進行し透析治療となり、ようやく4月から上京しましたが、腎臓の感染症、めまいに襲われ、3か月ほど入院・加療のため作業から離脱。この間、ケニアよりキクユ語がわかるモヨのスタッフをひとり派遣してもらい、翻訳作業をすすめました。10月より復帰し、ようやく本格的な編集体制にはいりました。

言葉が日本語で字幕されていくと、一気に子どもたちの内面世界が広がります。「起きろ、馬鹿者ども」「寝たところはきれいにしておかないと」。早朝、屋台のしたから這い出て来る子どもたち。紙を燃やして暖をとる。「タバコをこっちにも回せよ」「カメラがあると、お金くれないよ。ついてくるな」。

会話の内容もわからず、よくカメラを回したものと、今から思えばふしぎです。逆にこちらがキクユ語をわからないことが良かったのかもしれない。

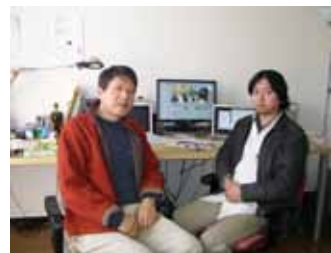
鉄屑やプラスチックを拾う子どもたち。シンナーをやめて学校にもどるよう説得するモヨのスタッフ。貧しいが陽気なスラムの母親たち。家に帰る子どもに同行し、親と話し合うテルさん。

夜、7、8人の子どもたちがお金を出し合い、奥まった路地でピラフを作る。鍋はどこかで拾った空き缶だ。ビニールの上に焦げついたピラフがあげられ、板の切れ端で口に運ばれる。「おこげをちょうだい」「熱い、ヤケドしそうだ」「ぼくにも」「おまえは金出してないじゃないか」「そうあわてないで食べろよ」。だれかが鍋ごと奪い取ってけんかが始まった。「ま

あ、まあ、けんかしないで」。吉田泰三カメラマンがねばり強く子供を追う。

だれかが空になった鍋をさかさまにして、ドラムがわりに棒切れでたたく。「タンタン、タタタタ・・・」そのリズムにのってみんなが踊りだした。

♪ 今は昔 99年も前のこと
 僕はまだ小さな子供だった
 その頃 街をぶらつくことを覚えたんだ
 貧乏は本当にいやだ
 僕の家は紙きれで出来ていて
 役所の人間に取り壊されたんだ
 今やもう僕には寝る場所もない
 だからトラックの下で寝るようになったのさ
 寒さが僕らの体に襲いかかってくる
 警察は皆ぼくらを泥棒と呼ぶ
 人々からは「チョコラ！」と罵られ
 本当に貧乏はいやなものだ



撮影総時間、120時間。ひとつひとつ小さなシーンを編集し、積み重ねていく。そのまとまりがまず10時間くらいにはなるでしょうか。そこからまた厳しい選択を迫られ、2時間程度の映画にする。まだまだ気の遠くなるような作業が待っています。しかし、いつかきっとゴールが見えますように。この映画の製作を押し進めてくれたわが畏友、佐藤真監督が急逝しました。この映画を佐藤監督に捧げられるよう秦さんとともに編集に格闘しています。

ナイロビマラソン・チャリティ・ラン
 写真アルバム



出発前



ゴールイン



待ちながら

パティの手術

新しい家の子どもたち その1

「新しい家」のパティ（13才）が膝の痛みを訴えだしたのが8月の終わりでした。まずティカ州立病院で診察を受け、そこで推薦されたナイロビの整形専門の病院で改めて検査した結果、病名は「くる病」「手術の必要がある」とのドクターの結論でした。しかし納得出来ず、日本へ問い合わせたりしたものの、最終的には手術に踏み切りました。その手術が決行されたのが9月21日。以下はその時の様子を記した私のブログからの抜粋です。

9月23日記

「…ドクターの回診を受け、手術室に入ったのが午前10時20分、その時には執刀のドクターはまだ手術室には来ていないとのこと、…。

1時間、2時間、3時間・・・と時間は経ちます。「何か事故でも?」「もしかしてシンナーの影響でも?」と不安は募ります。じりじりしながら待つこと4時間、やっと手術室

から出て来ました。声をかけるとこちらを見て頷きました。そのままレントゲン室に直行、レントゲンを撮り終え病室に帰って来たのですが、まだうつらうつらしているようでした。問いかければ答えるのですが、直ぐ目を閉じます。時には寝息も聞こえます。

点滴を受けながら眠っているパティの様子を見ると、右脚の太ももの付け根から足の裏まで脚全体がギブスで覆われ、足の指が少しのぞいていました・・・。」

結論としては彼は「くる病」ではなく、成長期に重なる単なる骨の変形だったとのが手術後の説明で判明、二転三転した病名とその治療方法に振り回されたパティの入院でした。

その後、成長線が傷ついているのが判明しギブスの作り変えもしました。最近はいつまでもはずして貰えないギブスに苛つき、態度も暴力的になるなどスタッフや他の子どもたちを困らせているパティです。近々ギブスをとって貰える予定ですが、今後のリハビリも含めまだまだ波乱含みです。

松下（詳しくはブログをご参照ください）

MOYO ギター教室

新しい家の子どもたち その2

松下さんがモヨの活動について講演されたのを聞き、強い感銘を受けたのがきっかけとなって10月半ばから夫婦で THIKA に来ています。MOYOの活動をお手伝いしていますが、「新しい家」の子どもたちがギターに強い興味を持ってくれたため、ギター教室をやるということになりました。

これまでに2時間位づつ4回行いましたが、もともと音楽好きな子どもたちなので毎回とても楽しい練習となっています。最初の弾き語り曲として日



練習風景 ケヴィン



本語の「ぞうさん」を教えたら、いつの間にかこれを皆で唄えるようになりました。

子どもたちが初めてギターを手にした時は、とても難しそうな様子で心配でしたが、少しずつギターの扱いにも慣れてきたようです。上達の仕方には個人差が出てきており、現在一番期待できそうなのはケヴィンのようです。ジョンも聴力が弱いのに良く頑張るし、パティやスティーブンも結構熱心です。時には近所の子供も遊びに来て参加しています。

MOYO ギター教室は、今後も週末やクリスマス休みに練習を続ける予定です。そして、12月中旬で私が日本へ帰った後も、このギターを子どもたちが自分で好きに使えるようになってくれることを楽しみにしています。

増田

ティカにおけるストリートの子どもたちの実態調査

ストリートの子どもたちへの支援活動

去る9月15日(土)午前9時30分～午後4時まで、ティカにおけるストリートの子どもたちの実態調査を行いました。この調査は7NGO、政府の子ども省、若者担当省、警察、県教育委員会、3公立小学校に加え多くのボランティア、会社等の協力のもと、ティカの3地区の小学校で実施されました。当モヨは準備段階から参加、当日はスタッフ、ボランティアも含め6名で参加しました。子どもたちへのインタビュー、食事の提供、エンターテインメントの準備等々目の回るような忙しさでした。

その3地区で面接を受けた328名の内226名がストリートチルドレンとして認定されました。その基本的な条件は毎日あるいは時に応じて「路上で寝ていること」です。

昨日(11月26日)もこの件に関する結果分析の為の会合が行われたのですが、最終結論と今後の対処に付いては次回会合(12月7日)に持ち越されました。その結果は当モヨの現状とも絡めながら次号で詳しくご報告したいと思います。 松下

ハートにシュート！！

11月25日(日)JOCV(青年海外協力隊)の主催によりティカにおいてサッカーイベントが開催されました。JOCVケニアでは現在、ケニア各地でサッカー巡業を行っておりこれを我々は「ハートにシュート！プロジェクト」と呼んでいます。プロジェクトの目的はもちろん子供たちの笑顔のため！あとJOCVが旨いビールを飲むため！と至極シンプルなものです。

当日はMOYO FC、地元のサッカー少年団であるSTARLET FOOTBALL ACADEMYそしてJOCVによる三つ巴形式でティカスタジアムにおいて大会は行われました。会場となったティカスタジアムはティカの街の中心部にあるサッカーフィールドで、ケニアのプロリーグの試合にも使われており、ケニア屈指のサッカースタジアムと言っても過言ではありません。スタジアムは青々とした芝に覆われ照明設備、観客用スタンドと環境は日本と比べても全く遜色ありません。むしろ日本のそれを上回っているのではないのでしょうか。

幸運にも当日は晴天に恵まれ最高の気候、そして設備の中で大会を開催することができました。大会はプログラムどおり順調に行われ…と言いたかった所でしたがSTARLET FOOTBALL ACADEMYのメンバーが大会開始時間の9:00になってもグラウンドに姿を見せない！！しかしながらここは何と言ってもポレポレ(ゆっくり)の国ケニア！JOCVとしても松下さんとしてもこのようなケースには慣れたもので試合日程を繰り上げることで対応しました。

大会を通じてMOYO FCは時間を非常にしっかりと守っていたことが印象に残りました。例えばMOYO FC開会式、閉会式においてもどのチームよりも(JOCVよりも)早く列を整えていました。このことは松下さんの日ごろの教育の賜物であると言えるのではないのでしょうか。

というわけでトラブルはありつつも第一試合MOYO FC - JOCVのホイッスルが吹かれました。MOYO FCはケ



ニア人特有の身体能力の高さに加え、松下さんの激しい躰による組織力、さらには勝利に対する貪欲なハングリー精神を持っており地元では殆ど敵なしといったすばらしいチームです。それに対してJOCVの平均年齢は30歳を越え、運動といえば寝返りを打つことぐらいです。唯一の武器といえば日本人の心意気ぐらいなものです。予想通りMOYO FCはJOCVを圧倒する展開となりました。結局3-1でMOYO FCが勝利を収めました。JOCVも意地を見せスコア以上に白熱した好ゲームとなりました。

第二試合のSTARLET - MOYO FCは2-2のドローとなり最終試合となったJOCV-STARLETはJOCVが日本代表の意地を見せ4-0で勝利を収めました。大会の終了後は参加者全員で写真撮影そしてゴミ拾いを行いました。11月27日のNATION誌(東アフリカ最大の新聞)には大会の様子の記事が掲載されました。

当初は子供たちの笑顔のために企画したこの大会だったのですが、結局、感動や笑顔を貰ったのはむしろJOCVの方だったのではないのでしょうか。子供たちはJOCVのプレーに対して惜しみなく賞賛を送ってくれました。国境、肌の色、年齢を越えた日本ではとても体験することなどできない時間を過ごすことができたと思います。

ハートにシュートを決められたのは我々JOCVでした。子供たちの笑顔に感謝の気持ちで一杯です。

青年海外協力隊 前之原 誠

ティカの方々と共に ギゼオリさんご夫妻

何かにつけお世話になるご近所のお医者様

医師のギゼオリさん（65歳）に初めてお会いしたのは2005年、「新しい家」の大家さんを通じてでした。ギゼオリさんのお宅は私たちと同じ「キボコ地区」、我が家から歩いて1分、子どもたちの「新しい家」からでも2～3分の所です。私がタウンへ出る時には必ず通る道筋で、始めてお会いした時にはギゼオリさんは既に私のことを知ってくださっていました。

「出来ることがあったらやらせて頂きますよ」と言ってくださるご好意に甘えて、その後何かにつけお世話になっています。「新しい家」の子どもたちが夜間急に熱を出した時、怪我をした時、私が足を痛めた時等々、時間を問わず無料で診察して下さいます。私が日本への一時帰国等で不在中も子どもたちが何かとお世話になっているようです。私たちにとっては何よりも子どもたちの健康が第一なので、近くに住み、時間を問わず相談に乗ってくださるギゼオリさんは本当に心強い支援者です。

また長い医師生活でお知り合いの医師も多く、必要に



応じてその方々を紹介して下さいます。パートナーのフローレンスさんは30年以上政府保健省やNGOで看護婦さんとして働かれ、今もエイズの患者さんをサポートするローカルNGOの一員として活躍されています。一方養鶏事業もされていて毎週たくさんのお卵をご寄附頂いています。「新しい家」の子どもたちにはとてもありがたい贈り物です。

「新しい家」の子どもたちが色々問題を起し、ご迷惑もおかけするこの「キボコ地区」ですが、ギゼオリさんご夫妻を初めとして、多くの方々のご理解とご支援のお陰で「新しい家」は存続出来ています。本当にありがたいことです。

松下

「モヨ・チルドレン・センターを支える会」会員募集

お一人でも多くの方に、一社でも多くの法人にご入会いただき、当センターを支えて頂ければ幸甚です。

		年会費	
		個人会員	法人会員
①正会員	日本	6,000円	20,000円
	ウガンダ・ケニア	4,000KSH	13,000KSH
②賛助会員	日本	3,000円	3,000円
	ウガンダ・ケニア	2,000KSH	2,000KSH

■経過報告（2007年12月4日現在）

正会員：日本85名（14名増）・ケニア7名（1名増・2名減-日本へご帰国・日本へ移行）計92名
 賛助会員：日本74名（14名増）・ケニア0名 計74名
 特別会員：日本39名・ケニア2名 計41名
 法人会員：5社（2社増）・グループ4
 総会員数：個人207名・法人5社・グループ4

■「支える会」よりお願い

郵便振替用紙を同封させて頂きました。通信欄にはコメントと共に会費・年度・寄付等詳細をご記入ください。皆様からのご協力を心よりお願い致します。

■「支える会」会費 / 寄付受付先

口座名：モヨ・チルドレン・センターを支える会
 代表者：高塚政生※郵便振替口座番号：01660-1-73996

■お知らせ

ケニアがリアルタイムで伝わる松下照美のブログ更新中です。HPからアクセスしてください。http://moyo.jp/

ケニア・ア・ラ・カルト⑩

ケニア国旗と国歌



国旗の黒は国民を、赤は自由のための闘争で流した血の色を、緑は果てしなく続く緑の大地を、白は統一と平和を表し、中央には槍と盾が描かれています。様々な場所で国旗が掲揚されていますが、国旗を粗末に扱ったり踏みじいたりすると、警察に連行されるそうです。

国家の歌詞もやはり正義・平和・自由・大地をうたっています。残念ながらメロディは昔のイギリスの民謡のようでアフリカ音楽という感じは全くなし。映画館に行くとき上映前に、国家斉唱があり驚かされます。

年末には総選挙を控えるケニア、部族を超えケニア国民として、正義のもとに平和に終わることを期待しています。

高橋

モヨ・チルドレン・センターの歩み

1997年11月 / ケニア政府大統領府 NGO ビューロー・インターナショナル NGO 登録の申請書類提出。
 1999年9月 / ケニア政府より国際NGOとして「モヨ・ホーム」正式に認可・登録される。
 2000年10月 / ティカにて、本格的に活動開始。
 2001年5月 / 「モヨ・ホーム」から「モヨ・チルドレン・センター」に改名。
 2004年4月 / 「モヨ・チルドレン・センターを支える会」発足。

編集後記

◎早くも2008年の新年が目の前。今年は2回しか通信をお届けできませんでした。来年は気持ちを引き締めさせて3回はと思っています。皆様よいお年をお迎えください。（テル）
 ◎経済成長が良好なケニアですが、物価がどんどん上がっています。物を買うたびに前ははいくらだったと文句ばかり言っています。（優香）
 ◎MOYO FCの活躍、楽しく読ませていただきました。（英）

モヨ・チルドレン・センター ●ケニア政府NGO局登録番号：OP.218/051/97223/1006
 P.O.BOX 2712 THIKA KENYA TEL/FAX：254(ケニアの国際番号)-067-22329 E-MAIL：moyo@africaonline.co.ke
 モヨ・チルドレン・センターを支える会 ●〒799-0702 愛媛県四国中央市土居町小林 1785-1 高塚政生方
 TEL/FAX：0896-74-7920 携帯電話：090-11715632 E-MAIL / tmasao@d1.dion.ne.jp

■これまでのモヨ・チルドレン・センター日本支部は「モヨ・チルドレン・センターを支える会神奈川支部」になりました。連絡先はこれまで通り 〒211-0011 神奈川県川崎市中原区下沼部 1916 青木康子：TEL/FAX：044-433-3447